

主題別ゼミナールの必履修化に関する提案

加藤 鋳 三

人文学部

内線 3141 kinoene@gipac.shinshu-u.ac.jp

要 旨

主題別ゼミナールは、課題探求能力の育成という本学の教育目標を担う戦略的授業である。それにも関わらず、約1/4の学生が受講していない。それを解消するには、この授業の必(履)修化しかない。現状の授業展開方法ではそれは不可能であるが、

- A：前期と後期で同じ授業を開く
- B：学籍番号が奇数の学生は前期に、偶数の学生は後期に受講する
- C：受講希望を web 入力でプレ登録する
- D：初回の授業でくじによる受講制限する

という4つの措置を取れば、必(履)修化は不可能ではない。それでも初年度は混乱が予想されるが、次年度の時間割編成ではプレ登録の結果を生かして、希望の多い授業内容のものを多く、希望の少ない授業内容のものを少なく開講する、という調整をすることによってその問題も大幅に緩和するはずである。

キーワード

主題別ゼミナール、課題探求能力、受講者数、必(履)修化、提案

1. はじめに

主題別ゼミナールは14年度から新設された授業科目である。その性格設定は、平成14年度以降の共通教育カリキュラム等改革WGによって次のように規定されている。

主題別科目・ゼミ 1 題目 2 単位 1 セメスタ 週 1 コマ クラス規模 20 名

20人クラス 総合大学であり、1年次に全学部の学生が松本キャンパスで学ぶことを活かして、さまざまなタイプの学生に触れてさまざまな物の見方を知る機会としても複数学部生混合で授業を行うようにする。したがって、20名を越えた場合の受講制限は、数の多い学部生から行うなど同一学部生に偏らないように措置をとる。教官の個性に応じて特徴あるゼミとする。

学問と社会との関係に関して事例的に研究を行い、学生が自分の知識や人生を社会との関係で位置付けてみる機会とする。その際、討論やプレゼンテーション等を積極的に取り入れたりすることを通じて、物事の多面的な理解と総合的な洞察力を涵養(かんよう)する方向で、教育内容・方法の改善を図る必要があるとともに、高等教育を受けた者としての基本的な学問知識を、理解や洞察の基礎として具体的に獲得する。

また、文化創造活動について事例的に研究を行い、人生や社会にとっての意義を考察する機会とする。その際、実践、実技、実習、討論、プレゼンテーション等を積極的に取り入れたりすることを通じて、人間についての多面的な理解と総合的な洞察力を涵養（かんよう）する方向で、教育内容・方法の改善を図る。

なお、小さな教室が必要になるので、在松学部の教官のゼミは、所属学部のゼミ室を用立てる。また、プレゼンテーション用機器を含めた情報機器の充実のために特別な予算措置を講じたり、文化創造活動についての環境を整えたりする必要がある。

平成14年度以降の共通教育カリキュラム等改革に関する報告書
平成14年度以降の共通教育カリキュラム等改革 WG より

この授業科目は、教室で座って話を聞いているのではなく、学生が自ら事例的な研究を行うところにその眼目がある。「課題探求能力の育成」という大学の掲げる教育目標実現に向け、一年次の段階から「課題探求マインド」を持たせるための授業として設定されたものであり、本学の教育戦略の一翼を担うものとして期待されている授業である。

2. 問題点

そのように期待される授業ではあるが、大きな問題点も抱えている。14年度の主題別ゼミナールについては、「信州大学での新入生ゼミナールと主題別ゼミナールの実態調査」（14年度本誌）で報告した。その際最も大きな問題点としてあげたものは、前期と後期の平均受講者数の差である。

14年度

- | | | | | |
|---------------|--------|--------|----------------------------------|-----|
| a. 前期主題別ゼミ | 授業数 | 34 | 全受講者数 | 760 |
| | 平均受講者数 | 18.41 | (134という例外的な数値を除外した平均値。除外前は21.71) | |
| b. 後期主題別ゼミ | 授業数 | 70 | 全受講者数 | 861 |
| | 平均受講者数 | 11.46 | (59という例外的な数値を除外した平均値。除外前は12.13) | |
| c. 前期+後期全受講者数 | 1621 | 1年次生総数 | 約2100 | |

14年度は、前期開講数は後期開講数の半分であり、平均受講者数は18.41人と11.46人と非常に差が大きい。また全受講者数は1621人であり、全一年生の約1/4が受講していない。

15年度は次のようであった。

15年度

- | | | | | |
|---------------|--------|--------|--------------------------|-----|
| a. 前期主題別ゼミ | 授業数 | 36 | 全受講者数 | 602 |
| | 平均受講者数 | 14.29 | (30以上を除外した平均値。除外前は16.27) | |
| b. 後期主題別ゼミ | 授業数 | 69 | 全受講者数 | 966 |
| | 平均受講者数 | 12.82 | (30以上を除外した平均値。除外前は13.8) | |
| c. 前期+後期全受講者数 | 1568 | 1年次生総数 | 約2100 | |

15年度は、授業開講数はやはり前期が後期の約半数である。しかし平均受講者数は、前期14.29人、後期12.82人と、14年度に比べればその差ははるかに小さくなっている。一方、全受講者数は1568人と、14年度より少なくなっている。

このように、前期後期の受講者数の違いは15年度では非常に改善されているため、これは今回は問題とはしない。今回問題にするのは、全受講者数である。

冒頭に述べたように、主題別ゼミナールは本学の戦略的授業科目である。そのため、『平成15年度共通教育実施の手引き』では、主題別ゼミナールについては「学生にも履修を強く勧める」ものとされている。平成14年度以降の共通教育カリキュラム等改革WGは、主題別ゼミナールを必修とすることも検討したようである。しかし必修化は断念し、「学生にも履修を強く勧める」という表現に留めざるを得なかったようである。その理由に関する報告はない（が、すぐ下で推察する）。

さて、必修化を検討するほど重要な主題別ゼミナールであるにも関わらず、全一年次生の約1/4が受講していないという事態は、深刻であると言わざるを得ない。

3. 必修化の障害

この問題は、主題別ゼミナールを必（履）修化すれば自動的に解消する。しかし、先に述べたように、必修化は上記WGで検討対象にはなったものの、実現しなかった。ここではその理由を推察する。

英語や専門基礎などの必修科目は例外なく学部・学科・専攻別のクラス編成となっている。つまり、学生は必修科目を履修する場合、どのクラスに出席するのかに選択の自由はなく、初めからクラス指定されている。

一方、主題別ゼミナールは、一年次段階のゼミという場で、学生が自分の所属以外の学部の学生と一緒に学ぶ機会を与えることをその趣旨の一つとしている。冒頭にあげた主題別ゼミナールの規定でも、次のようにその点を強調している。

総合大学であり、1年次に全学部の学生が松本キャンパスで学ぶことを活かして、さまざまなタイプの学生に触れてさまざまな物の見方を知る機会としても複数学部生混合で授業を行うようにする。

よって、主題別ゼミナールでは学科・専攻別のクラス指定をするわけにはいかない。また、主題別ゼミナールには様々な授業が用意されているが、もしクラス指定をすれば、せっかくの多彩な授業展開を活かすことができず、また学生の興味にあった授業を学生が自分で選択する方がはるかに望ましい。

このように、主題別ゼミナールでは、クラス指定はあり得ない。更に、規定にあるように、授業の趣旨から適正人数を20人と設定し、それを超える受講希望者がいる際には、受講制限をするよう勧めている。そのため、主題別ゼミナールを必（履）修とした場合、非常に大きな混乱が予想される。このような理由のため、上記WGは必（履）修化に踏み切れなかったものと推測される。

4. 提 案

2節で、約1/4の一年次生が主題別ゼミナールを受講していないことを問題視した。その解決には、この授業の必（履）修化しかないことも示唆した。しかし、3節で見たように、実際には必（履）修化は不可能である。

しかし必（履）修化が不可能であると言うのは、現状の登録方法ならびに現状の授業展開を前提としてのことである。ここでは、この授業の必（履）修化を可能にする登録方法と授業展開を提案したい。なお、この提案は加藤個人のものではなく、加藤が担当した主題別ゼミナール「大学を変えよう」の今年度の授業で受講生たちと一緒に考えたものである。

提案

- A：主題別担当教員の全員が前期と後期で同内容の授業を1つずつ開講する。
- B：学籍番号が奇数の学生は前期に、偶数の学生は後期にしか履修できない。
- C：1年次生ガイダンス修了後プレ登録（登録はWeb入力）し、その結果を公表する。
- D：初回授業の終わりに人数調整する。調整はくじで行う。

以下、これらの趣旨を説明する。

提案A：主題別担当教員の全員が前期と後期で同内容の授業を1つずつ開講する。

提案B：学籍番号が奇数の学生は前期に、偶数の学生は後期にしか履修できない。

15年度はかなり改善されたが、14年度では前期と後期の受講者数平均には非常に大きな開きがあった。（なお、改善の理由は分からない。共通教育担当部局である、高等教育システムセンターの共通教育企画部門の働きによるものではないことは確かである。）これは、前期と後期の開講授業数が1対2であることと同根であろう。なお、前述の『平成15年度共通教育実施の手引き』では、「ゼミナールは、後期に設定することを原則とする。」とされている。それにも関わらず、1/3が前期に開講されていることにも問題はありますが、提案Aはこれを自動的に解決するものである。提案Bによって学生を前期と後期に二分する。これにより、前期と後期の受講者数が均等になるはずであるが、提案Bを実施するためには、提案Aを実施することによって学生の授業の選択幅を保証しなければならない。

提案C：1年次生ガイダンス修了後プレ登録（登録はWeb入力）し、その結果を公表する。

16年度から、履修登録はweb入力化されることになっている。提案Cはそれを前提としたものである。ガイダンス時にシラバスが配布されるが、一年次生はそれを見て履修したい主題別ゼミナールの授業を一つ選び、web入力によりプレ登録する。共通教育支援室はそれをすぐ集計し、授業ごとの希望者数を即時公開する。一年次生はそれを見てどの授業を選ぶか自分で調整する。これは一年次生は高校受験時に経験済みのはずである。

プレ登録は、次年度の授業展開のためにも有益である。プレ登録の多かった授業内容に近いものを次年度では増やし、少なかったものを減らすことによって、次年度からは履修登録をよりスムーズに行うことができるようになるはずである。

提案D：初回授業の終わりに人数調整する。調整はくじで行う。

授業の趣旨から20名以上のクラスは望ましくないため、受講制限は必要である。それをくじで行う。受講制限を行う際には、学生の熱意を図ることが望ましい。この場合、受講制限が必要になるクラスを希望するということは、それ自体がその授業に対する熱意を表していると解釈できる。何故なら、初回の授業時には、提案Cによりプレ登録の結果が既に公開されているからである。プレ登録で受講希望者が多い授業であるにも関わらずそれを選択しているのだから、受講制限でその授業を取ることができなくなる、という危険を承知の上で初回の授業に出てきているからである。だから熱意という点では希望者間で大差がないと見なすことができるため、くじによる調整でよいことになる。なお、くじを引く際に、学部分布（学部別受講希望者数）を考慮に入れることも考えられるが、くじがはずれた学生はその考慮を理不尽と感じるであろう。また、授業内容によって特定学部の受講生が多くなることは避けられないし、またそうあって自然というべきである。学部バランスに考慮するべきではないと思われる。

受講制限では、小論文を書かせて熱意を図るというやり方も考えられるが、作文を読んで本当の熱意を図ることは実際には難しいだろうし、また担当者がじっくり読んでいる時間もない。初回の授業が終わるまでに受講制限をしてしまわなければならないからである。もし受講制限で取れなかった場合、学生は別の授業を選択し、かつ次週にはいずれかの授業で20名以内に入っていなければならないため、受講制限は初回の授業時間内で終わっていなければならない。

プレ登録の段階で決めず初回の授業で決めるのは、20人以内に収めるということの他に、学生が実際に授業と教師を見てみる必要がある、という理由がある。もしかしたらシラバスと実際の授業とでは印象が違つかもしれないし、教師との相性もあるだろう。プレ登録していたとしても、もし学生が合わないと感じたなら本登録する必要はなく、別の授業を探すべきである。その意味では、提案Cのプレ登録は純粋に希望調査に過ぎない。

これらの提案を実施するとしたら、初年度は初回の週だけでなく第2週でも受講制限が必要になってくるかもしれない。しかし2年目以降は、初年度のプレ登録という資料があり、提案Cの説明の最後で述べたようにそれを使って授業展開を予め調整することができるため、問題は緩和されることが予想される。

5. まとめ

主題別ゼミナールは、課題探求能力の育成という本学の教育目標の実現をねらった戦略的な授業である。それにも関わらず、約1/4の一年次生が受講していない。それを解決するには、必（履）修化しかない。しかし現行の授業展開・履修登録法のままで必（履）修化するのは不可能である。4節ではそれを可能にすると思われる提案A～D（次に再掲）を提出した。

提案

- A：主題別担当教員の全員が前期と後期で同内容の授業を1つずつ開講する。
 B：学籍番号が奇数の学生は前期に、偶数の学生は後期にしか履修できない。
 C：1年次生ガイダンス修了後プレ登録(登録はWeb入力)し、その結果を公表する。
 D：初回授業の終わりに人数調整する。調整はくじで行う。

参考文献

加藤鉦三(2003)「信州大学での新入生ゼミナールと主題別ゼミナールの実態調査」,『教育システム研究開発センター紀要』9, 29-51。

資 料

平成15年度 主題別ゼミナールの受講登録者数一覧表

15年前期 主題別ゼミナール 授業別受講者数		
主題群	主題	受講者数(1数字1授業)
主題群A 知と人間行動	宇宙船地球号	19
	現代の社会	6, 20, 40, 19, 21, 20
	学問・古典論	12, 19
	信州論	8
主題群B 精神と文化の動態	世界の言語・文化の諸相	12, 3, 9, 16
	日本の言語・文化の諸相	
	芸術とスポーツの諸相	14, 21
	思想と歴史の諸相	4, 6, 5
主題群C 自然環境と生命・物質	物質の構造と材料の科学	46, 21, 6
	生命のしくみ	25, 15, 19, 18, 12, 18
	自然のしくみ	21, 15, 15, 30, 11, 7, 25, 20
主題群D 社会の構造と動態	経済と社会	
	法と政策	
主題群E 数理と科学技術	数理の世界	
	現代技術と情報科学	

15年後期 主題別ゼミナール 授業別受講者数		
主題群	主題	受講者数 (1数字1授業)
主題群A 知と人間行動	宇宙船地球号	
	現代の社会	16, 21, 7, 23, 21, 11, 15, 4, 9, 4, 29
	学問・古典論	12, 26, 19, 7
	信州論	15, 22
主題群B 精神と文化の動態	世界の言語・文化の諸相	7, 20, 5, 4, 25, 5, 4
	日本の言語・文化の諸相	18, 12, 11, 14, 2, 19, 11, 12, 22
	芸術とスポーツの諸相	12, 20, 21, 9
	思想と歴史の諸相	13, 7, 10, 9, 15, 5, 15, 24, 18, 19, 8, 8
主題群C 自然環境と生命・物質	物質の構造と材料の科学	8, 5, 11, 8
	生命のしくみ	13, 12
	自然のしくみ	20
主題群D 社会の構造と動態	経済と社会	6, 2, 22, 10, 13
	法と政策	6, 16, 27, 11
主題群E 数理と科学技術	数理の世界	5, 9
	現代技術と情報科学	52, 3, 42